

デジタル田園都市の価値の見える化

株式会社New Stories 太田直樹

6月1日の提出資料で、Well-Being指標について大きく2つのことを提案した。

- ・ Well-Being指標は地域全体だけでなく、ロジックモデルを通じて、個別事業/サービスと結びついた形で、成果を測定し、PDCAを回すことができる。
- ・ さらに、ロジックモデルを通じて、地域住民や企業などのステークホルダーが、地域の未来について共に考えることができる。

他方で、デジタル社会実装事業やスマートシティの官民事業が動いている現場を回ると、「メリットがよく分からない」という声が少なくない。

事業が実証だけで終わり、地域で「結局なんだったのか」という失望やあきらめにならないよう、以下の表で「価値の見える化」という視点から検討ポイントを整理した。

事業価値の見える化レベル

	見える化・自分ごと化・共有
レベル1	マクロな課題のみ 例：公共交通に不満
レベル2	KPIを設定 例：MaaSの利用数
レベル3	ロジックモデルを設定 例：短期・個人の成果から、長期・社会の成果まで
レベル4	ロジックモデルと第三者評価 例：ロジックモデルの検証と改善
レベル5	ロジックモデルと個人の物語 例：なぜ外出しなかった私が変わったのか

例えば、今年度のType2事業に採択された「ぐんま共創モビリティサービス推進事業」は、レベル4で事業を準備している。

レベル1、2

レベル1の「マクロな課題のみで事業を行っている」ケースは、まだまだある。

課題意識を持って、レベル2の「KPIを設定」に移行するのはよいが、落とし穴は「取りやすいKPI」のみを設定し、そのサービスが地域の暮らしを豊かにし、持続していった

めの肝を押さえていないケースである。事業が進むと、KPIが思うように達成できなかったり、達成しているが地域でメリットが感じられないという状況になり、補助金がなくなると終了してしまうことになりやすい。

レベル3

ここでは、サービスによって、短期的に利用者個人に起こる変化（成果）から、中長期的に地域社会で起こる変化（成果）を、因果関係、例えば、外出機会が増える（短期・個人）と健康が増進する（中期・個人/社会）を踏まえて設定する。

様々な方法があるが、ロジックモデルが有効である。

ここまでできると、サービスが地域のメリットを生み出し、持続していくための肝が見える化されるが、短期から中長期の成果項目は10以上になることもあり、因果関係を含めて整理するのは、それなりの検討を要する。

また、ステークホルダーによって経験の濃淡、例えば、事業者は短期の利用者視点の理解が深く、行政は中長期の地域視点の関心が高いなどの違いがあり、事業関係者が共通の言語で議論できるまでには時間がかかる。

ただ、逆に言えば、これらに時間をかけることによって、事業開始後に（必ず）起こる想定外の状況についても、深い議論を行うことができる。

レベル4

上記の因果関係については、「一定数歩くと健康によい」といった確立されたものもあるが、Well-Beingの領域には、研究が進行中のものが多い。例えば、「社会参加が健康寿命によい」という考え方はあるが、具体的にどのような因果関係があるのかはまだ明らかになっていない。また、幸福度と多様な自然との関係も研究が進んでおり、Walkable Cityやグリーンインフラの水辺のある暮らしなどの成果を検証することができるようになってきている。

専門家が参加することで、最新の研究も参照しながら、よりよい成果を生み出すことができる。スマートシティサービスは、様々な行動データが取得できるので、研究者にとっても魅力がある。

レベル5

ロジックモデルは、地域住民から見ると「お仕着せ」と受け取られやすい。これは、中長期の成果（ありたい姿）からバックキャストिंगすることが、「今の暮らしを否定されている」あるいは「自分やこの地域に合わない」という個人・地域とのギャップを生みやすいからである。

例えば、モビリティサービス事業を推進している群馬県・前橋市では、自動車を保有していない高齢者の外出比率は、保有している高齢者より30ポイント以上低く、それが地域の公共交通への不満や健康の悪化につながっていることを踏まえて、ロジックモデルを組み、事業を設計しているが、高齢者が外出しない/外出する理由は実際は様々であり、モビリティサービスが提供されると行動が変化するという単純なものではない。

（マクロな）ロジックモデルと個人の物語の接続は、挑戦領域である。

最前線の取り組みでは、個が動き始めるきっかけ・要因、例えば「誰か一人でも自分のことを気にかけてくれる存在との出会い」や、個から面/面同士のつながりのきっかけ・要因を、フィールドインタビュー等を通じた帰納的なアプローチによって構造化し、ロジックモデルを設計する試み¹がある。

今後は、ミクロ・現状からの一歩踏み出しと、マクロ・未来からのバックキャストिंगを組み合わせたモデルによって、地域全体の大きな成果も目指しながら、個々の主体性やそれによる持続性も生まれるサービスをつくっていく可能性が見えている。

デジタル田園都市やスマートシティの事業価値の見える化を深めていくためには、ロジックモデルを含めた事例の充実、ガイドラインの策定、ワークショップの実施等があるとよい。

以上

¹ 住民主体の共生型地域づくり及びその社会的価値の見える化と地域マネジメントに関する研究、堀田聡子(慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科)、2020年厚生労働科学研究